教員・職員・学生による初年次教育の取り組み
―「自立と体験 1」3 年間の取り組みから ―

鈴　木　浩　子※

1. はじめに

平成 22 年度より開講した明星大学の全学初年次教育「自立と体験 1」は、3 年間の実践を終えた。その間、明星教育センターでは、さまざまな方面からの協力を得ながら、授業内容、授業手法、授業運営等について改善を重ね、より良い授業構築の努力を続けてきた。こういった努力は、学生からの一貫した高い評価等の成果に大きく寄与したと言えるだろう。

特に、「自立と体験 1」の授業が、さまざまな立場の人たちの関わりにより実施・検討される仕組みであることは、大きな特徴であり、教員・職員・学生の関わりにより、より良い授業が作られているとも言える。初年次教育として、一部の限られた教職員のみが関わるのではなく、大学全体で新入生を迎え入れ、大学に定着するサポートをしていくことの効果は大きい。

本稿では、様々な立場の人の関わりを整理することで、教員・職員・学生が協働してつくり上げる授業の意味について考察する。

2. 授業の概要と 3 年間の実践結果

2-1.「自立と体験 1」の授業の概要

「自立と体験 1」は、1 年前期の必修科目として、学部学科横断の少人数クラス（30 人程度）で実施されている。教育目標は「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」、到達目標は「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」であり、そのためにグループワーク、体験からの学びを主とするアクティブラーニングを取り入れている。また、学生の主体的な学びをサポートするために、ポートフォリオを取り入れている。

授業は各学科の専任教員、特任・常勤教員、非常勤教員が担当し、共通シラバス、共通教案により、各担当教員の個性を活かしながらも一定の内容・質を確保する方法をとっている。

表 1. 平成 24 年度「自立と体験 1」授業内容

第一節 人と関わる	1	オリエンテーション
	2	新しい環境で他者と出会う
	3	大学での学びを考える
	4	聴いて相手を理解する（1）
	5	聴いて相手を理解する（2）
第二節 人と関わる・学びのスタートを切る	6	明星大学を知る
	7	明星大学を紹介する
	8	図書館にふれる
	9	大学職員に取材する
	10	自分や相手の大切さを知る
	11	ルールとマナーを考える
第三節 大学生活を見通す	12	卒業生から学ぶ
	13	仕事と自分について考える
	14	これからの大学生活を描く
	15	未来の自分へのメッセージ

全 15 回の授業は、表 1 のとおりである。学生が大学に慣れ、大学生活を充実させていくためのスキルを身につけ、今後の大学生活の計画を立てられるように設計されている。

※ 人文学部　特任准教授　明星教育センター

2-2. 出席率

3 年間の「全 15 回平均出席率」は表 2 のとおりである。

第 15 回授業終了時に、受講学生に対して「自立と体験 1」独自の詳細なアンケートを実施する中で、学生の興味関心の低い授業の内容改善、授業手法の工夫を行ってきた。それにより、15 回を通して高い出席率を維持することができている。

表 2. 全 15 回平均出席率

年度	平均出席率
平成 22 年度	82.7%
平成 23 年度	84.9%
平成 24 年度	85.1%

「ためになったと思う授業」を尋ねる学生アンケートの結果からも、学生の授業への興味が高まっていることを見ることができる。15 回の授業の中から「ためになったと思う授業」を複数選択させる設問に対して、平成 22 年度は 1 人当たり平均 3. 2 回の授業を上げているが、平成 23 年度は 5. 5 回、平成 24 年度は 5. 2 回の授業を上げている。「ためになった」と感じることと授業への興味は、同義とは言えないが、学生の授業の受け取り方の変化を見ることはできるだろう。

2-3. 単位修得率

単位修得率は、表 3 のとおりである。

3 年間を通して、90%以上の単位修得率を維持しており、さらに、15 回の授業内での単位修得率が向上していることは、注目できる点だと考える。1 年生の大学への適応を支援する初年次教育という観点から考えれば、15 回の授業に継続して出席し続けることができる学生の比率を維持し、さらに増やすための改善が必要だろう。

表 3. 単位修得率

年度	単位修得率 1 *	単位修得率 2 **
平成 22 年度	89.9%	93.9%
平成 23 年度	88.5%	91.4%
平成 24 年度	91.0%	94.1%

* 単位修得率 1：前期授業での修得率
** 単位修得率 2：補習授業を含む修得率

2-4. 授業の特徴的な点についての評価

授業については、第 15 回目の授業終了時の学生アンケートの結果からも見てみたい。「自立と体験 1」の特徴的な点について「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の選択肢のうち、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した「肯定的回答」の学生の比率は表 4 のとおりである。

表 4.「自立と体験 1」授業アンケート（第 15 回終了時実施）　肯定的回答の比率

設問	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
「少人数クラス」は役に立ちましたか？	89.9%	90.0%	91.8%
「他学部・他学科との交流」は役に立ちましたか？	92.6%	92.7%	93.3%
「グループでの学習活動」は役に立ちましたか？	89.2%	90.6%	91.4%
「ポートフォリオ」は役に立ちましたか？	81.0%	75.5%	79.3%

これらの結果から「自立と体験 1」は 3 年間を通して学生から高い評価を得たと言えるだろう。

3. 教員の関わり

3-1. 授業担当教員の概要

ここからは、教員・職員・学生の「自立と体験 1」への関わりについて、具体的な実践結果を見ていく。まず最初に教員の関わりを上げていく。「自立と体験 1」の授業は、専任教員、特任･常勤教員、非常勤教員により実施される。

3 年間に担当した教員の内訳は表 5 のとおりである。

表 5.「自立と体験 1」担当教員数

年度	専任	特任・常勤	非常勤	合計
平成 22 年度	45	5	1	51
平成 23 年度	46	5	1	52
平成 24 年度	45	5	2	52

前述のとおり、「自立と体験 1」は、少人数クラスでグループ学習を中心とした授業となっている。教員は講義による知識付与型の関わりではなく教育ファシリテーターとしての関わりが必要となる。また、「自立と体験 1」で学生が学習する内容は、スタディ・スキルとソーシャル・スキルの要素が大きい。

スタディ・スキルとソーシャル・スキルについては、次のように整理できる（佐藤 2010）。

スタディ・スキル＝大学で主体的、能動的に学ぶために必要とされる技能のことであり、以下のような力に具体化される。

（1）聴く・（2）読む・（3）調べる・整理する・（4）まとめる・書く・（5）表現する・伝える

（6）考える・（7）覚える・（8）時間を管理する

ソーシャル・スキル＝人間関係を円滑に進めていくための技能のことで、他のメンバーと協力し合いながら共通の目標を達成するために、相手の立場を思いやり、チームの中で自分の果たすべき役割を考え、責任ある行動をするスキルである。米国の大学では、下記のようなテーマを通して教えられるソーシャル・スキルは初年次教育の重要な要素として位置づけられている。

人格発達・自己認識・大学への移行・キャリアの発見・多様性への気づき・健康管理・目標の設定・人間関係・葛藤の解決の仕方・価値づけ・共同体への奉仕・文化的なイベント体験

このような授業を実施していくにあたり、専任教員へのサポートとして、複数回の説明会を実施した。平成 24 年度の実施状況は、表 6 のとおりである。

表 6.「自立と体験 1」担当教員向け説明会

	実施時期	対象	説明会内容
授業手法に関する説明会	平成 24 年 1 月～ 3 月	「自立と体験 1」を初めて担当する教員及び担当教員のうち参加希望者	ファシリテーターとしての関わり方、授業内で使用する手法理解、グループ学習体験
事前説明会	平成 24 年 2 月～ 3 月	「自立と体験 1」担当教員全員	授業の構成・内容理解、教案・教材の使用方法
第三節説明会	平成 24 年 6 月	担当教員のうち参加希望者	第三節で使用する手法・教材の使用方法

3-2. 担当教員による授業改善への関与

担当教員は授業を担当するだけでなく、実際に授業を実施する中での意見を授業改善に反映させるという役割を果たしている。意見を収集する方法としては、ランチミーティング、グループリーダー制、ご意見アンケートがある。

ランチミーティングは、毎週金曜日の昼休みに開催し、授業を実施して気付いた点、学生の様子、次回に向けての修正点などの情報を共有する。そこでの意見は、毎週配信する「自立と体験 1 ニュースレター」で、全担当教員に共有されるほか、次年度以降の授業改善にも役立てられている。

グループリーダー制は、担当教員を 5 つのグループに分け、特任・常勤教員がそれぞれのグループのリーダーとなる仕組みである。グループリーダーは、定期的にメール等で担当教員とコミュニケーションを取る。連絡事項の伝達、疑問点の解消とともに、今後に関する改善意見の収集の意味もあり、平成 24 年度は担当教員からの意見に基づく追加資料の配付等も実施した。

ご意見アンケートは、第 15 回の授業終了後に実施するもので、平成 24 年度は表 7 の設問について聞いている。

表 7.「自立と体験 1」担当教員ご意見伺いシート設問内容

1	第 1 回から第 15 回の授業のうち、学生にとって良い内容だったものとその理由
2	課題とポートフォリオ提出、担当教員からのコメントの効果
3	学生の授業への取り組みの様子、学生の変化、気づいたこと
4	「自立と体験 1」を 1 年生前期で実施するメリット・デメリット
5	TA/SA を付ける効果
6	授業運営サポートについて役立ったものとその理由
7	担当教員説明会についてのご意見
8	授業を担当してみて教員自身が感じたこと
9	担当したご感想・ご意見
10	昨年度と比較して、感じたこと、気づいたこと
11	来年度に向けての提案

3-3. 専任教員が担当する意味

佐藤（2010）は、「ソーシャル・スキルは、スタディ・スキルとあわせて教えることが有効とされている」とし、また「スタディ・スキルやソーシャル・スキルは、初年次の学生に教えることが一般的ですが、高年次までに何度も繰り返し教えることで定着度は高まります」と述べている。

専任教員のうち、半数程度は継続して担当しているため、「自立と体験 1」を担当した経験のある教員数は延べ人数と一致しないが、大学内で授業内容を熟知している教員が増えていくことは、大きく 2 つの点で意味のあることだと考える。

1 点目は、このようなソーシャル・スキルとスタディ・スキルを 1 年生が学習していることを理解している教員が増える点であり、2 点目は、高年次までに何度も繰り返し教える機会と場がつくられる可能性ができる点である。平成 24 年度の担当教員のご意見アンケートから、専任教員が授業を担当することの意味を探ってみたい。設問 8 の各項目についての結果は表 8 のとおりである。

表 8.〈先生ご自身について〉
設問 8「この授業を担当してみていかがでしたか？以下の当てはまるものすべてに○を付けてください」

	項目	人数*
1	「自立と体験 1」の授業を担当することを楽しんだ	22 人
2	「自立と体験 1」の授業を担当するのは大変だった	11 人
3	グループ学習形式の授業は進めやすかった	15 人
4	グループ学習形式の授業は難しかった	8 人
5	用意された教案のやり方を変えたり工夫したりして授業を進めた	14 人
6	担当したことで自分の専門の授業にも何らかの影響があった	10 人
7	学生との関係に変化があった	6 人
8	またこのような形式の授業を担当してみたい	10 人

* 回答数 30 人中、○を付けた教員の数

設問 8 については、なぜ○を付けたのかを聞いている。厳しい意見もあったが、ここでは、前述の「専任教員が授業を担当することの意味」に関係すると思われる内容を表 9 に抜粋した。

6-1 から 6-8 までは、項目 6「担当したことで自分の専門の授業にも何らかの影響があった」に関係すると考えられる記述である。また 7-1 から 7-3 は、項目 7「学生との関係に変化があった」に関係すると考えられる記述である。

表 9.「設問 8 で○を付けた項目についてなぜ○を付けたのか具体的にお書きください」への記述抜粋

6-1	初めて体験したが実に楽しく、また私自身も学ばせて頂いた。質問リレーなど私の講義でもどんどん活用させていただいた。
6-2	是非、全ての教員が一度は担当すべきと思います。
6-3	授業の幅を広げることが出来た。今の学生の気質に合わせた授業のヒントをもらえた。授業方法の幅を広げるためにも、自分の授業を再確認するためにも有効なので、多くの教員の方に担当していただきたいと思いました。
6-3	語学の授業で、今までよりも学生主体で取り組んでもらうようになり、学生さんが外国語でコミュニケーションを取るように意識づけることができたかと思います。
6-4	次々と担当教員が替わり、協同学習の良い点を体験できるようにするのが良いと感じました。
6-5	当方の専門分野と違うことが新鮮で面白かったが、大変なことも多々あった。
6-6	他学部の学生の考えを知ることが出来て楽しかった。また、担当したことにより、当然のことでも丁寧に指導することに意味がある事を見いだしました。専門科目の授業においても、基礎からじっくり何度も話すことで、学生の理解度が上がったと実感しています。
6-7 7-1	今年度は初めての担当だったので、原則基本にのっとって実施した。楽しい授業であったというよりは、その大変さも含めて「充実していた」「達成感がある」という印象である。グループはそれぞれ個性があり、個々の状況を踏まえながら学習支援することはやはり難しい。しかし、学生の自己学習力を実感することも多く、自身の教育観にも良い影響を与えたと感じる。
6-8 7-2	学生たちがいきいきと学び成長している姿を間近に見られ、教員冥利に尽きる授業でした。より多くの教員がこの授業を担当し、このような教育手法を他の授業でも工夫しながら応用して欲しいです。
7-3	学生の成長度合いをグループを通じて肌で感じられた（グループ学習の merit）。

また、設問 9「担当したご感想・ご意見」への記述には、次のようなものがあった。

・学生が予想以上にこの授業を楽しいと感じたり、ポートフォリオから本人の学びの力がのびたことがわかり、この授業の意味を理解することができたと思う。学生からたくさんのことを学ばせてもらえたと考えている。

・大学生を相手に、ここまでやる必要があるのかどうかに戸惑いがありましたが、学生の反応や授業を実際に担当したことによって、こうした授業が必要なものであることを実感しました。

これらの記述からは、「自立と体験 1」を担当することにより、スタディ・スキルとソーシャル・スキルを学生に学習させる必要性に関しての理解が深まっていること、また、高年次までに何度も繰り返し教える機会と場がつくられる可能性ができることが分かる。専任教員が「自立と体験 1」を担当することに意味があることを示唆する結果だと考える。

4. 職員の関わり

4-1. 職員の関わりの概要

平成 22 年度の開講当初から、「図書館にふれる」「大学の施設にふれる」の授業の中で、図書館職員や学生サポートセンター、ボランティアセンターの職員に学生対応を依頼してきた。この授業内容は学生評価も高く、職員と学生がふれあうことの意義が大きいと考えられたことから、平成 24 年度より「図書館にふれる」「大学職員に取材する」という内容に再構成した。「大学職員に取材する」の授業で「学生に習得してほしいこと」として、教員向け教案に次のように示した。

・学生が身近な社会人である大学職員と交流し、働くことについて考えるきっかけをつくる

・大学にある様々な施設、研究機関、部署などを知り、大学組織に興味を持つ

学生向けのポートフォリオでは、インタビュー内容として、表 10 の項目を示した。

表 10.「大学職員にインタビューする」 インタビュー内容

1	施設・部署の役割（大学の中でどのような役割を果たしているか）
2	施設・部署の具体的な業務内容
3	施設・部署の構成メンバー
4	＿＿＿＿＿＿さんの仕事内容
5	＿＿＿＿＿＿さんの仕事のやりがい、楽しさ、仕事をする上で心がけていること
6	グループからの質問（自分たちで考えて質問してみよう。複数でも可）

また、インタビューした内容は「取材報告書」にまとめ、学生が作成した「取材報告書」は、取材協力を依頼した各部署にフィードバックした。

取材協力を依頼した職員向けに、取材を依頼する目的、具体的な対応方法等を説明する説明会を実施した。大学生として「初対面の大人」と接する機会を持たせる意義も説明した。

4-2. 職員の関わりの効果

「大学職員に取材する」は、平成 24 年度の第 15 回授業時に実施した学生アンケートで、28. 4%の学生が「ためになった授業」だと答えている。自由記述欄で、職員インタビューに関連した記述には表 11 のようなものがあった。

表 11. 第 15 回授業時学生アンケート　自由記述欄　抜粋

1	大学職員の方々へのインタビューでは面白い話をたくさん聞くことが出来たので様々な大学の情報を知るとともに、楽しい時間を過ごすことが出来て良かった。
2	一番「大学職員に取材する」という授業が心に残っています。実際に総務課など普段かかわらない所にかかわり生の声を聞けるのはとてもいいと思いました。
3	他者理解の第一歩になった。インタビューとか、普段の授業ではしないことができて、とても印象的だった。

また、教員のご意見アンケートにも「大学職員に取材する」について、表 12 の記述があった。

表 12. 教員ご意見伺いアンケート

設問 1「第 1 回～第 15 回の授業のうち、学生にとって良い内容だった授業とその具体例」抜粋

1	職員の方々の準備が素晴らしかったことが、ポートフォリオから伺えた。
2	学生の印象に残っているようでした。
3	レポート課題では、このテーマを取り上げる学生が非常に多く、関心の高さが伺える。身近な社会人モデルに触れること、日頃関わることのない部門の方々の学生、大学に対する思いに感動し、将来の自分をイメージする学生も多かった。
4	大学職員は社会人としての先輩でもあり、「社会人になることを前向きにとらえる」うえで重要なステップとなりました。
5	他者との実地の接触である点が良い。
6	今回は総務や人事もはいっており、学生自身から、自分たちが多くの支えを得ていることを実感できている声が多かった。
7	大学を知ることと、働くことを理解できたのではないか。
8	良い意味で「先輩が後輩に自らの体験を語る」という機会を設けたのは成功であった。職員の事前研修を徹底すればなお良い。
9	職員さんの熱心で丁寧な説明に学生も感激していた。

これらの記述からは、身近な社会人としての職員にふれることで、後半の「キャリアを考える授業」への良い橋渡しとなっていることが分かる。また同時に、大学で学ぶ自分たちが多くの教職員に支えられていることを実感する機

会ともなりえる。

取材対応を依頼した職員にも、アンケートを実施した。設問は表 13 のとおりである。

表 13.「自立と体験 1」職員アンケート設問内容

1	学生対応を担当したことによる変化（学生の印象・「自立と体験 1」の印象）
2	担当して感じたこと、気づいたこと
3	授業運営に関して、気づいたこと、困った点
4	事前の事務局からの情報共有は十分だったか
5	インタビューを受けることで、自身に関して気付いた点、改めて考えた点、感じた点
6	「大学職員に取材する」の担当を楽しんだか。それはなぜか。

アンケート回答者数 16 人のうち、「1 年生に対する印象が変わった」と答えた人は 6 名であった。学生の印象は、実際に接した学生によってまちまちであり、「積極的だ」「自ら取り組む姿勢がある」「はつらつとしたイメージ」という記述がある反面、「おとなしい」「ただその場にいるだけ」といった記述もあった。日ごろ、学生に接することが多い部署と少ない部署とにより、感じ方は異なっているようであった。

職員から見た「職員インタビュー」については、表 14 のような記述があった。全体として肯定的な意見が多く、「職員が関わること」については、職員自らも、学生にとってプラスになると感じているようである。

表 14. 職員アンケート　設問 2「担当して感じたこと、気づいたこと」等　抜粋

1	新入生が少しでも早く能動的に大学のシステム（本学の仕組み）に馴染むために今後、ことさら欠かすことができないと感じた。
2	職員が授業に関与する機会が増えればと思います。
3	実際に仕事をしている私たちの話が、体験から生まれていることだということで、より学生さんに響くものが、あったのかもしれません。
4	学生が、職員の仕事内容について知ることができる。
5	グループによっては会話が弾み、こちらの思っている以上に話を引き出されてしまった。
6	大学職員に取材することを通じて、自分がこれから学ぶ明星大学を身近に感じ、様々な部署に支えられ、見守られていることに感謝する気持ちが芽生えたと思います。
7	1 年生は仕事に対して漠然とした印象しか持っていないということを事前説明会で伺っていたが、思っていたよりも「知りたい」「理解したい」という能動的な姿勢で質問してくれて単純に驚いた。また想像以上に学生の理解度が高かったことも喜ばしかった。
8	大学生になってまだわずかな日数しか経っていないので、難しいかとは思いますが、ただ業務を知るのではなく、もう少し「働く」といった視点で大学職員の業務を見ていただければ、将来、就きたい職業を決めるヒントのひとつになるかと思います。
9	初年次教育の必要性・重要性を考えるうえで、「自立と体験 1」は大事な役割を果たしていると考えるが、対象とする学生が限られており、意欲の高い学生は物足りなさを感じたり内容を不満に思う可能性が高いと思われる。（一部筆者修正）

4-3. 職員が関わることの意味

スタディ・スキルとソーシャル・スキルを、高年次までに何度も繰り返し教える機会と場をつくっていくためには、担当教員だけでなく、職員がその必要性を理解することが重要である。学生は、多くの大学職員と接しながら大学生活を送っており、特に、ソーシャル・スキルについては、学生と接する機会のある職員も含めた「周囲の大人全体」で、学習する機会をつくっていくことが欠かせないと考える。そのため、職員にも、「自立と体験 1」を通したスタディ・スキルとソーシャル・スキルの学習の必要性と、高年次まで何度も繰り返し教える機会と場をつくる必要性を理解し

てもらうことが必要になる。

「自立と体験 1」の授業が目指すものは、一部の職員には理解されていたが、日常的に接点の少ない職員には周知されていない現状があると考えられた。そのため授業に参加することで、「自立と体験 1」についての理解をより深める場をつくりたいと考えた。

表 13 のとおり、職員インタビューでは「自立と体験 1」に対する印象は変わったかを尋ねた。変わったが 6 名、変わらないは 6 名と同数であったが、この設問は「十分理解していて変わらないのか」「理解できていなくて変わらないのか」が不明なため、ここから何らかの考察をすることはできなかった。

職員自身への意味としては、大きく分けて 2 つの点が上がっている。1 点目は「学生と接することによりモチベーションがアップする」「通常業務を離れた学生とのコミュニケーションを楽しんだ」ということであり、2 点目は「自身の仕事に対する思いや考え方を振り返り整理する機会となった」「分かりやすくすることを意識する」「学生の関心を引き出す答え方」などの、自身を振り返る機会となったということであった。職員自身も楽しみ、自分への理解を深める機会となれば、それにより学生とのやりとりに関してもプラスの効果が生まれ、やり取りの質が高まり、良い循環が起こっていくということが推察できる。

5. 学生（SA/TA）の関わり

5-1. 学生（SA/TA）の関わりの概要と効果

平成 22 年度開講時より、各クラスに SA/TA を配置していたが、平成 24 年度より、原則として各クラス担当の学生（SA/TA）1 名を固定とし、責任意識をもって担当するよう変更した。

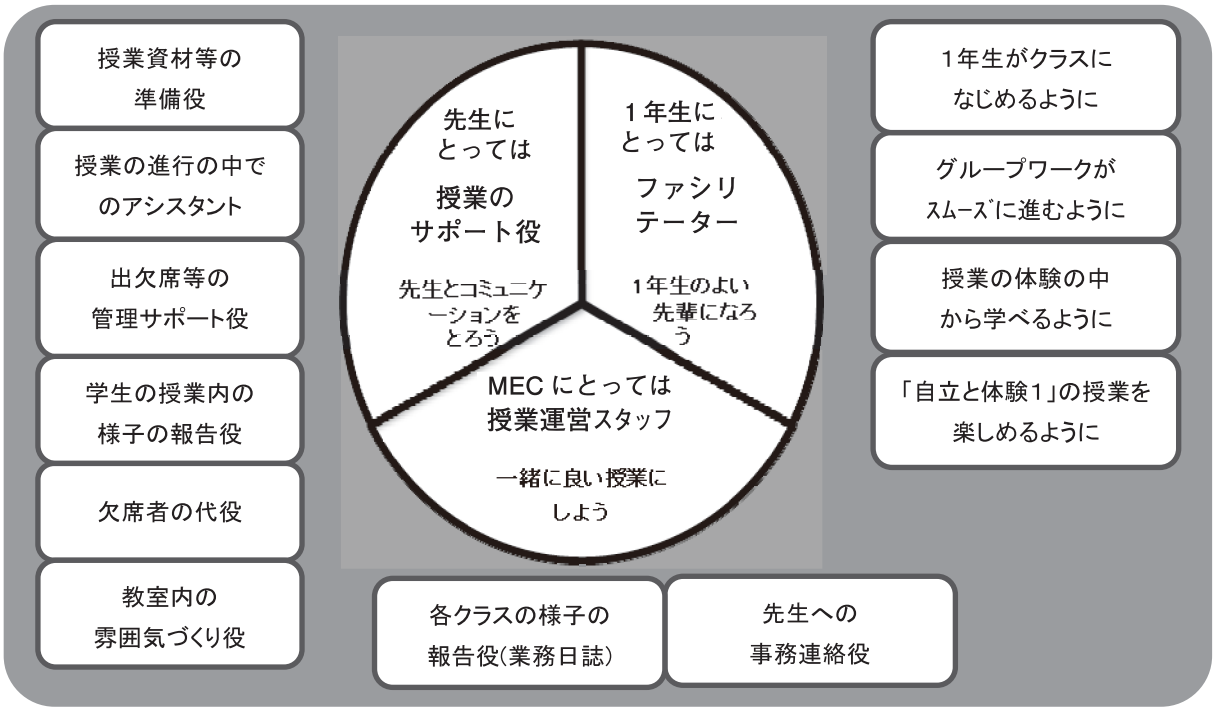
SA/TA は、担当教員からの推薦または勤労奨学生の希望者から選抜し、3 月に事前研修を行い、表 15 のような役割期待を説明したうえで各クラスの授業サポートについた。

従来より、SA/TA の評価は高かったが、平成 24 年度も学生（1 年生）、担当教員双方から、高い評価が得られた。

学生（1 年生）のアンケートの自由記述では、個別の名前を挙げて、SA/TA にお礼を述べる記述が非常に多かった。1 年生にとって、SA/TA が非常に身近な存在だったことが分かる。SA/TA は、教員とは異なった立場で学生に関わり、学生が授業に積極的に参加するためのサポート役を果たしている。また授業以外の場面でも身近な上級生として、1 年生と大学をつなぐ役割を果たしている。

平成 24 年度の教員アンケートでは、設問 5「SA/TA は有効に機能したと思われますか？それはなぜですか」に対して、YES と答えた人数は、30 名中 28 名であり、その理由も、授業の運営そのものに寄与した、学生との信頼関係を築けていた等、単なる物理的なサポートを超えた存在であったことが分かる。「自立と体験 1」にとって、SA/TA は教員同様、欠かせない役割だと言えるだろう。

表 15. SA/TA の役割期待



5-2. SA/TA 自身にとっての意味

SA/TA 本人にも、15 回の授業終了後、アンケートを実施した。平成 24 年度の設問内容は表 16 のとおりである。

表 16. 「自立と体験 1」SA/TA アンケート設問内容

1	第 1 回から第 15 回の授業のうち、学生にとって良い内容だったものとその理由
2	学生の授業への取り組みの様子、学生の変化、気づいたこと
3	「自立と体験 1」を 1 年生前期で実施するメリット・デメリット
4	授業運営サポートについて役立ったものとその理由
5	授業を担当してみて SA/TA 自身が感じたこと
6	担当したことによる、自身の変化、感想・意見
7	昨年度と比較して、感じたこと、気づいたこと

アンケートの回答を通して、SA/TA の目から見た「学生にとって良い内容だった授業とその理由」や「1 年生の変化」などの意見を聞くことができ、授業改善のヒントとなっている。

設問 5 ～ 7 では、SA/TA 自身にとって、「自立と体験 1」の授業補助がどのような意味があったかを聞いているが、多くの SA/TA が学びがあり、楽しかったと記述している。

設問 5 の項目に○を付けた SA/TA の人数は、表 17 のとおりである。

アンケートから、SA/TA が、1 年生との交流を楽しみ、成長を間近で見ることを楽しみ、また 1 年生との交流を通して気づき学び、改めて自分を見直す機会を持ったことが分かる。

表 17. 設問 5「この授業を SA/TA として担当してみていかがでしたか？
以下の当てはまるものすべてに○を付けてください。」

	項目	人数*
1	「自立と体験 1」の授業補助をすることを楽しんだ	26 人
2	「自立と体験 1」の授業補助を担当するのは大変だった	12 人
3	グループ学習形式の授業は進めやすかった	14 人
4	グループ学習形式の授業は難しかった	7 人
5	1 年生との関係に変化があった	22 人

* 回答数 31 人中、○を付けた人数

表17設問5のそれぞれの項目になぜ○を付けたのかについての自由記述、および表16設問6から「SA/TA 自身にとっての意味」に関係すると思われる内容を表 18 に抜粋してみた。

表 18. SA/TA アンケートの中で「SA/TA 自身にとっての意味」に関係する内容の抜粋

1	自分も 1 年生と一緒に授業内容について考えていて、一緒に成長できたと思います。
2	3 年間の大学生活を踏まえての後輩へのアドバイスなどを話す機会がいただけたので、今までの自分の大学生活を見直すことができた。即興で自分の考えを話す練習にもなった。
3	SA としてクラスをまとめる力は、今後自分が先生になった時に必要となる資質であると思う。そこで、このような形で SA ができたのは自分にとって貴重な経験となりました。
4	自分たちが受けているというのと、補助として参加するというのは全然違います。大学の先生が授業をするのって、けっこう大変なんだなと思いました。学生一人一人に気を配って、本当によく見ているなと思いました。だからこそ良い授業になるんだとも思いました。逆に学生側に立っていえば、班の中だけでなくクラス全員と接することができて、いろいろな人の考えや性格を見れて良い刺激になりました。
5	前に立って発表することに対しての自信が付きました。
6	人と関われば関わるほど、人の気持ちを考えられる人間になれると思っているので、このような機会があって、とても自分にとって良かったと思う。
7	15 回の授業を通して、毎回変化していく 1 年生の姿を見ることができました。そういった中で、人と関わることや人の成長を見ることの素晴らしさを感じることができました。
8	私は物事をストレートに相手に伝えることが多いのですが、今回授業補助を担当したことで、どういう言い回しをしたら相手に最も自分の意思を伝えることができるのかを改めて学びました。これは、授業内だけでなく日常生活の中にも影響しており、物事をより客観的に見るようになりました。
9	もっと自分の中で意識を高めれば、遅刻もせず、自分に自信が持てることを知りました。何事も気持ち次第で何にでもなるということが分かりました。
10	大勢の前で話すことや、人と接するトレーニングとして、とても良いものとなった。
11	他学部で後輩ができることはめったにないことなので、いろいろな人と関われてよかったです。1 年生のときとは違い補助という立場でやってみて、スムーズに進めるには、どうすれば良いのか考えるのが大変でした。たくさんの意見が聞けて、自分の視野が広がった。
12	学生との輪がまた広がり、さらに教授とも大変関わるようになり、たくさん学ぶ場をもらった。また自分自身を振り返ることもでき、前向きな気持ちになれた。単純に楽しさを味わうことが学習には必要だと感じ、ここでの楽しさとは人間関係面のことであると感じた。
13	先生との連携、学生全体の様子を見るなど、多方面に目を向けることが、自分の行動範囲や視野を広げることにつながりました。

SA/TA は様々な学びや変化を上げているが、内容を見ていくと、SA/TA 自身のスタディ・スキル、ソーシャル・スキルの向上につながる内容が多いことが分かる。これによりここでも、「高年次まで何度も繰り返し教えること」が実現できていると考えることができる。また「教える」というより、「学生自らが学べる場を提供している」と言うこともでき、SA/TA 本人にとって、非常に学びの多い経験になると言えるだろう。

6. 学生（1 年生自身）の関わり

平成 24 年度より、1 年生自らが「自立と体験 1」の授業運営に関わる仕組みを導入している。

「明星大学を知る」の授業内で学長、上級生の話を聴く。それに自分たちで調べた情報を加えて、「明星大学を紹介する」の授業内で、「高校生に明星大学を紹介するポスター」を作成した。実際に大学で学んでいる学生ならではの内容を盛り込んだポスターは、実際にオープンキャンパス等で展示され、好評であった。

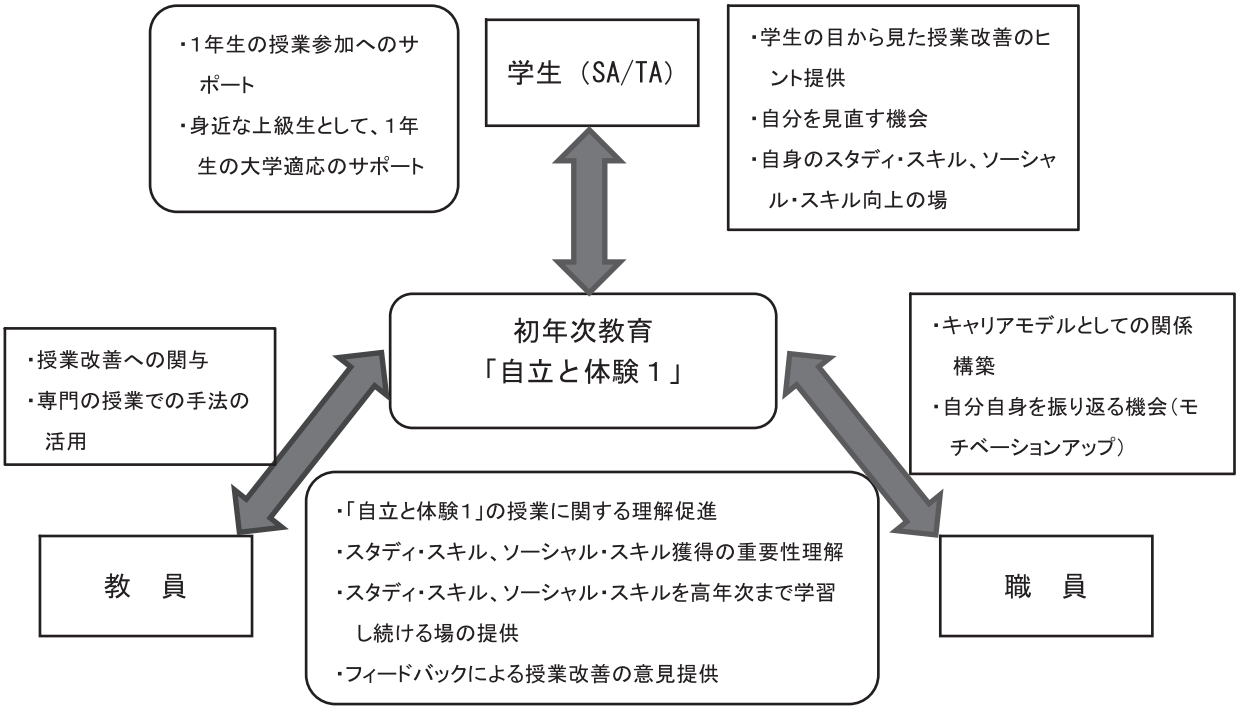
この試みの効果についてはまだ実証できないが、受講している 1 年生自らの活動が「自立と体験 1」の授業の周知につながるという仕組みが、「大学全体での授業運営」の一要素となっていくのではと期待している。

7. 考察

ここまで見てきたように、教員・職員・学生が関わって、初年次教育「自立と体験 1」を実施する仕組みは、授業自体に対して良い影響を与えるだけでなく、教員・職員・学生自身にとっても何らかの影響を与えている。

この相互関係は、全体として、学生がスタディ・スキルとソーシャル・スキルを大学生活を通して学び続ける仕組みとしても作用しているのではと考察できる。教員・職員・学生（SA/TA）の相互関係について表 19 にまとめてみた。教員・職員・学生（SA/TA）と「自立と体験 1」が、双方向の矢印で結べることが理解できる。

表 19.「自立と体験 1」と教員・職員・学生（SA/TA）の相互関係



引用：佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』 p.65

「自立と体験 1」に関しては、一部の学生には必要な授業だが、こういった授業が必要のない学生もいる。授業内容のレベルが低いという意見が、平成 22 年度の開講当時から聞かれている。この点について、次の研究を参考までに挙げておきたい。

佐藤（2010）は、スタディ・スキルとソーシャル・スキルの要因から表 20 のポジショニングチャートを作成し、2 つのスキルがともに高い第 1 グループの学生について、次のように述べている。

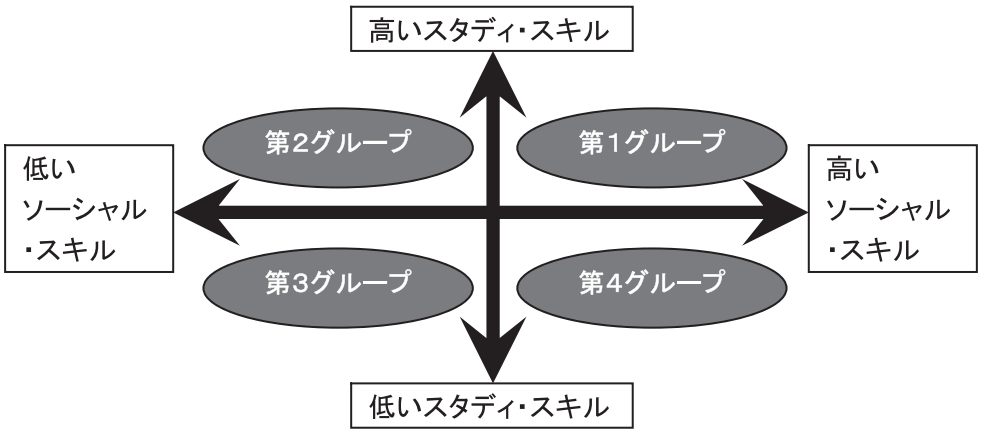
「豊富な友人関係や教員との人間関係を上手に活用し、身についたスタディ・スキルを十分に活用して、目標を達成できる学生です。さらに高い両スキルを身につけて、他の学生の学習をリードしてもらう必要があります」

つまり、第 1 グループから第 4 グループの学生まで、全ての学生がそれぞれの必要性を持ってスタディ・スキル、ソーシャル・スキルの獲得のために初年次教育に取り組む必要があるということになる。

現状では、表 11 の 9 の指摘のように、授業内容のレベルが低いという指摘は、少ないながら学生や教員からも見られることがある。授業内容に関してもさらなる改善の必要性はあるだろうが、必要性の周知もさらに重要だろう。

学生が大学で主体的・能動的に学び、充実した大学生活を送るための初年次教育の重要性を、多くの関係者が理解できることを目指していきたい。それにより「自立と体験 1」とそれに関わる教員・職員・学生（SA/TA）との相互関係を強化していくことができるのだと考える。今後も、この効果をさらに高めるための改善を続けていきたい。

表 20.　キャンパスでの成功を規定する 2 つの要因



引用：佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』 p.65

引用文献

佐藤浩章編　『大学教員のための授業方法とデザイン』　玉川大学出版部　2010 年